資料と通信

ヨーロッパの美術館・博物館における展示報告

中野　紀和

Ⅰ．訪問の経緯

筆者は、文部科学省科学研究費特定領域研究（A）による「わが国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究（江戸のモノづくり）」（2001年～2005年）と題したプロジェクトの一環として位置づけられている計画研究班（A03C）「個々の資料から見た江戸時代の職人の色彩、造形に関する研究」（2002年～2005年）の一員として、2003年と2004年にヨーロッパの博物館および美術館を訪れる機会を得た。メンバーのそれぞれが各自のテーマを持ちつつ、グループ全体としては、フランスおよびドイツを中心としたヨーロッパと、日本の磁器づくりの工程の相違を、映像によって明らかにすることを目的としている。4年間にわたるプロジェクトの前半の2年間は、各地の工房をまわり、実際の制作現場を見せていただくと同時に、撮影に入る前の下準備の期間であった。その際、工房周辺の磁器関係の美術館や博物館をまわり、そのコレクションから技術や用途の変遷を把握することに務めた。日本では佐賀県の酒井田柿右衛門窯、ヨーロッパではドイツのマイセン、オランダのデルフトの工房において、2004年9月に実際の撮影に取り掛かっている。

今回の通信では、これまでの調査でまわった博物館や美術館のなかから、筆者の関心に即して展示資料を紹介したい。我われの訪欧の目的が磁器制作の調査を目的としていたことは前述のとおりであるが、この報告は磁器だけでなく、日本に関する展示および現代社会を反映した印象深い企画展についても触れていくこととする。

＜報告対象の美術館・博物館＞

① ツヴィンガー宮殿・ドレスデン磁器美術館（ドイツ・ドレスデン）／2003年2月

② トロッペン博物館（オランダ・アムステルダム）／2003年2月

③ セーヴル美術館（フランス・セーヴル）／2004年2月

④ デンマーク国立博物館（デンマーク・コペンハーゲン）／2004年3月

⑤ 手工芸博物館（ドイツ・フランクフルト）／2004年3月

Ⅱ　博物館・美術館の展示報告

①ツヴィンガー宮殿・ドレスデン磁器美術館（ドイツ・ドレスデン）

ツヴィンガー宮殿は、18 世紀前半、ザクセン王フリードリヒ・アウグスト１世（アウグスト強王）の時代に建てられた。内部は、磁器美術館、アルテ・マイスター絵画館、武器博物館、動物学博物館、数学物理学博物館からなる。磁器美術館は、17 世紀から 18 世紀にヨーロッパで流行した中国趣味の影響を受け、中国や日本の磁器に対する収集熱が高まるなかで、アウグスト１世によって完成された。中国ならびに日本の磁器（特に Kakiemon style）のコレクションは、皿や徳利のような小さな器だけでなく、大きな壷や人形が多く、王のコレクションの一部であることがしのばれる。さらに、Kakiemon style を真似て、異国情緒を醸しだすことを意図してヨーロッパで作られた器類（図柄はやしの木等であったが）等も見ることができる。

②トロッペン博物館（オランダ・アムステルダム）

オランダのアムステルダムにある同博物館は（写真１）、中央のホールを囲む回廊式に展示室が配置されており、アジアやアフリカ、中南米といった各地域ごとに仕切られている。日本や朝鮮半島、中国といった東アジア地域の展示室は、他の展示室に比べ照明が暗く、動物の剥製や骨格が天井から吊るされている。部屋の一角に鎧兜が置かれ、それによってそこが日本コーナーであることがかろうじてわかる。すぐ隣に朝鮮半島のものと思われる家具が置かれ、漢方薬のような植物が置かれている。後ろの棚には、伊万里や有田の大皿が中国、朝鮮の磁器とともに並べられている。これらの展示から、アジア各国、少なくとも日本と中国、朝鮮の違いを見つけだすことは難しい。さらに、鎧兜や伊万里焼は江戸時代を喚起させる。鎧兜は、ヨーロッパにとってのステレオタイプ化された日本のイメージであろう武士の世界の象徴である。

そのなかにあって、日本の白磁器がヨーロッパの王侯貴族のコレクションとしてもてはやされて以降、伊万里焼は日本文化の象徴として取り上げられている。この展示からは、各国の違いを把握することが難しいだけでなく、時代を知ることも難しい。これらは常設展示であり、ヨーロッパにとってのアジアへのまなざしが象徴的に表出されている。このような展示のあり方は同館に限ったことではない。次に述べるデンマーク国立博物館においても見られる展示である。

しかし、その一方で、トロッペン博物館の企画展である「GROUP PORTLAIT OF SOUTHEAFRICA －NINE FAMILY HISTORIES－」（写真２）は、大変示唆に富む内容であった。９家族の暮らしぶりをそれぞれのブースで表現しており、入り口には家族の歴史が記され、等身大の家族の写真が貼られていた（写真３）。複数形で語られる不特定の誰かではなく、特定の個人の顔を見ることによって、そこに表現されている暮らしがリアリティのあるものと

して立ち上がる。

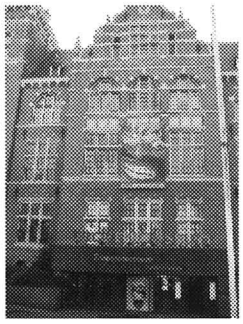


写真１

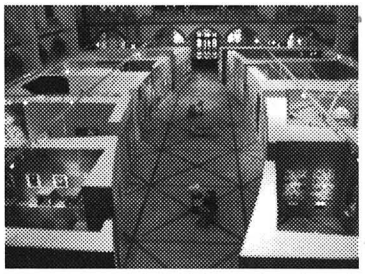


写真２

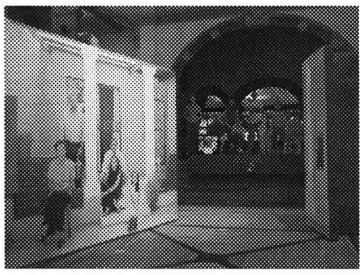


写真３

ブースの中は、写真だけで表現したもの、中身の入ったクローゼットや家具、そこにぺたぺた貼り付けられたシール、電化製品などさまざまである。この展示が示唆しているのは、多様性にほかならない。そして、多様性が具体的な個人の生活の蓄積のうえにあることを思い出させてくれる。「SouthAfrica」と一括りに語ることはできないのである。ミクロな事象を詳細に理解し、そこから南北差や民族、宗教といったマクロな問題へとつなげていこうとするのが、文化人類学のフィールドワークであると筆者は理解しているが、それを展示という可視的な表現に転換することの難しさにも戸惑う。その意味で、同館の企画展は現代社会の多様性や重層性を積極的に捉えようとする斬新な展示であった。

同館にはチルドレン・ミュージアムが設置されているが、ここは子ども同伴でなければ大人が中に入ることができず、内部を見ることができなかったのは残念であった。

③セーヴル磁器美術館（フランス・セーヴル）

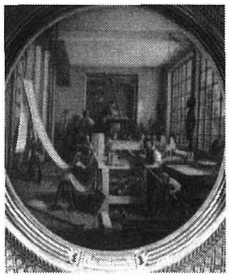
写真４

パリ郊外にあるこの美術館は（写真４）、18 世紀半ば頃から現代まで、セーヴル窯で制作された磁器が年代順に陳列され見やすい配置になっている。ルイ 15 世やポンパドュール夫人、デュ・バリー夫人たちが好んで作らせた磁器も、それぞれの特徴がわかりやすいように並べられている。

なかでも筆者が最も関心をもったコレクションは、当時の暮らしぶりや技術の発展を垣間見ることのできる絵皿であった。職人たちの工房や作業風景を描き出したものである。それらを写真で紹介しておきたい。貨幣の鋳造といった経済活動を支える技術、印刷技術や製紙産業にみられる情報伝達を支える技術、蹄鉄技術が支える人やモノを運ぶ交通手段、大工や木材の伐採、ガラスづくりといった民衆の暮らしを陰ながら支える技術、ビールや菓子の製造といった、日々の生活

に彩りを与えたであろう技術等、当時の社会を知る上で貴重な情報が盛り込まれている。最も数多く描かれているのはセーブル焼きを制作する工程である。工房だけでなく、材料調達の過程から題材として取り上げられている。貴族の嗜好品として、磁器がどれほどの価値をもっていたのか想像に難くない。

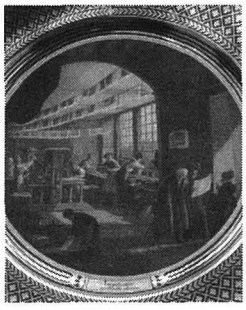
Monnoyage
貨幣鋳造



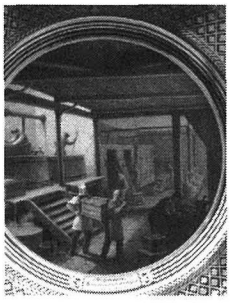
Papiers peinta
壁紙づくり

Lithographie
石版印刷

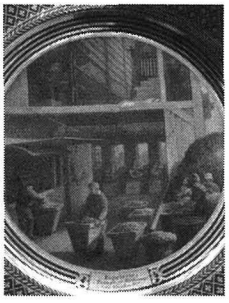
Typographie
活版印刷



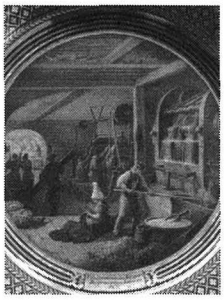
Imprimeur
印刷業者



Papeterie
製紙工場



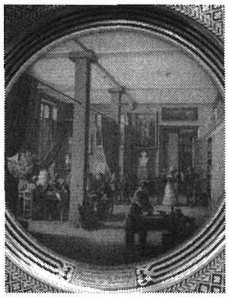
Papeterie
製紙工場



Fabriation des Draps
毛織物製造

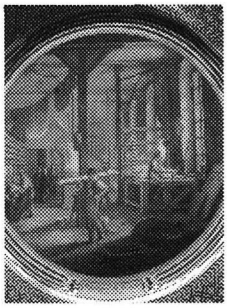
Fabriation des Draps
毛織物製造

Porcelaine de Sevres
セーブル磁器

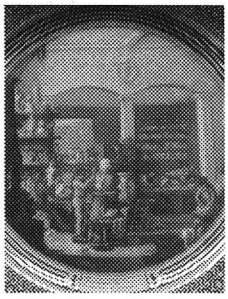


Porcelaine de Sevres
セーブル磁器

Porcelaine de Sevres
セーブル磁器

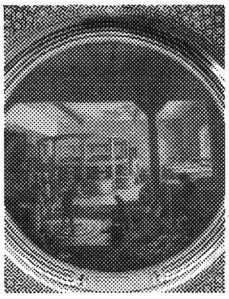


Porcelaine de Sevres
セーブル磁器

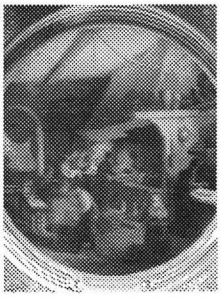


Porcelaine de Sevres
セーブル磁器

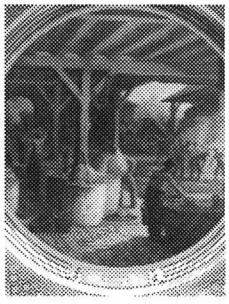
Porcelaine de Sevres
セーブル磁器



Porcelaine de Sevres
セーブル磁器



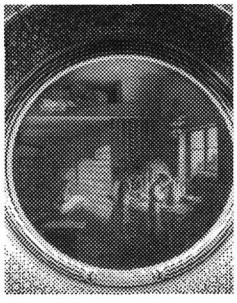
Fondeur d' Ol' et d' Argent
油と銀の鋳造工



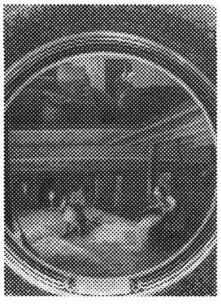
Salpetri e rs
硝石工廠

Exploition de la Meuliere
珪質石灰岩の採掘

Charpentier
大工



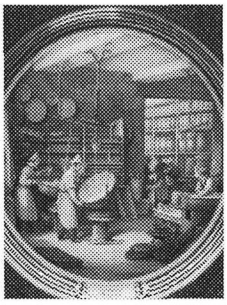
Raffinerie de Sucre
砂糖精製所



Brasserie
ビール工場

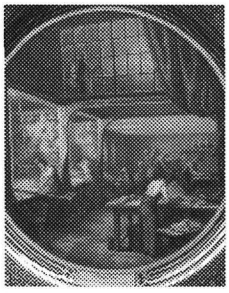
Le Marechal Ferrant
蹄鉄工

Sabotier
木靴工

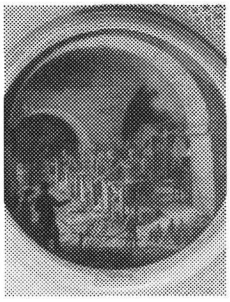


Confiseur
砂糖菓子製造業者

Bucherons
材木伐出人



Chapelier
帽子製造人



Verreris
ガラス工場

④デンマーク国立博物館（デンマーク・コペンハーゲン）

写真５

同館の民族展示は、グランドフロアーと１階、２階からなり（写真５）、展示内容も質、量ともに充実している。

日本展示は１階と２階にあり、１階は大名家の甲冑や刀剣類、化粧道具が主であり、屏風や茶道具といった他の博物館でも見られる内容であった。２階には、「Buddhism」「Shintoism」の展示がおこなわれている。

さらに、箕笠など藁や木製の民具、アイヌ関連の資料、伊万里焼のコレクションがそれぞれ陳列されている。「Buddhism」では古い小さな厨子のなかに多くの仏像を置いたものを並べるなど、キリスト教のイコンの展示が思い出される（写真６）。「Shintoism」では神職の着物が展示され、その片側には狛犬、小さな社と御幣、稲荷などが並ぶ。もう一方には羽子板や雛人形、子どもの玩具がおかれている（写真７）。別のケースには、生け花の道具と男女の着物、さらに農具などが並んでいる。アイヌ資料も比較的スペースを割いて展示されている（写真８）。

写真６

写真７

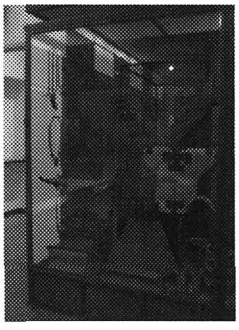


写真８

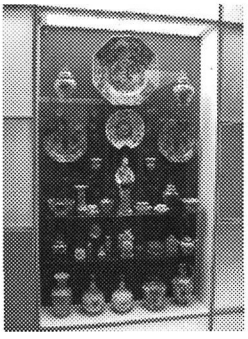


写真９

他の博物館や美術館同様、ここでも伊万里焼は別格の扱いである(写真９)。磁器コーナーは、中国、韓国・朝鮮と一緒に広いスペースが割かれており、その日本コーナーには埴輪や各地の陶磁器が並んでいる。それらとはまったく別に、伊万里焼の展示がある。ここにも伊万里焼がヨーロッパに及ぼした影響の大きさをうかがい知ることができる。だが、同館の日本展示には統一感がなく、見る者に積極的に日本を発信しようとする姿勢を見出すのは難しい。

なお、同館にはチルドレン・ミュージアムも併設されているが、時間の都合で内部を見ることができなかった。

⑤手工芸博物館（ドイツ・フランクフルト）

写真 10

同館は、1877 年に創設され、1985 年に増築されて現代に至る写真 10)。展示はヨーロッパ、東アジア、イスラムに分けられている。なかでもヨーロッパ家具のコレクションは、中世から現代に至るまで充実した展示となっている。陶器や布、織物なども常設展示されている。

日本に関する展示は、焼物や漆、絵画が中心であった。同館は日本美術や工芸の新しい側面にも関心をもっているようであるが、訪問時は古いものを中心とした展示であった。ヨーロッパ展示のなかに、18 世紀半ばに作られた「伊万里風装飾(Imari-Decor)」を施された食器が並んでおり、当時のヨーロッパ工芸における日本とヨーロッパの交流の一端を見ることができる。

全体的に東アジアで大きなウェイトを占めていたのは、中国工芸であった。訪問時にも、中国のモダンアート作家 Chen Shaofeng の「The Voiceless People －Dialog mit den Bauern」が開催されていた（写真 11)。

Chen のとるアプローチは、農村に出かけ、農民一人一人の像を描くと同時に、相手も Chen を描くというものである。そこに描かれた Chen の像に同じものはなく、描き手の内面を映し出す。従来の中国絵画がとってきた方法とは、まったく異なる視点で美術を捉えなおしている。彼の作品が、同館で現代中国の象徴として取り上げられていることは、企画者の関心もさることながら、今後の同館のコレクションにおける「現代」の扱いにも反映されることが推測される。同時に、集団と個人の関係が再考されつつある動きがアートシーンからも垣間見えるという点で、印象に残った企画展であった。

写真 11

Ⅲ　まとめ

ヨーロッパの美術館や博物館をいくつも回るうちに、ある傾向を見ることができた。「日本展示のステレオタイプ化」と「多様性を表現することに対する模索」である。

日本展示のステレオタイプ化

現代の我われの生活から乖離した展示は、ヨーロッパの国々が日本に関心をもった 17、18 世紀の頃からそれほど変わっていないのではないかと感じずにはいられない。展示の内容については、コレクション収集のための館の財政事情にも左右される。この点が現代の展示に大きく影響していることも考えられる。同時に、磁器の東洋的絵付けに見られるシノワズリやジャポネズリが、アジアへの憧憬（異国趣味ではあるが）として、いまなお博物館や美術館になかで息づいていることも否めない。

今回の報告では取り上げていないが、オランダ・アムステルダムの国立博物館やライデンの博物館においても、同様の傾向がみられた。国立博物館では、江戸時代の鎖国に関する資料の展示が多くなされていた。とりわけ目をひいたのは「Portlait of Barnbarian People」と題する絵であった。巻紙に描かれたその絵は、斬首後の光景であったと記憶している。また、ライデンでは佐渡の金山の坑道で働く人びとのミニチュアや、家財用具一式のミニチュア等が展示されていた。小さくて「奇妙」さを演出したような展示は、観客の興味をそそるのであろうが、現代の我われからすると時間の止まった展示といわざるを得ない。

このような状況を前にしたとき、ネイティブである我われがどのように自らを表象するのか、という問題につき当たる。それは日本国内における展示にも跳ね返ってくるはずである。近代以降をどのように扱い発信していくのか、避けることのできない課題であろう。

多様性を表現することに対する模索

美術館や博物館の常設展示ではなく、企画展のなかに興味深い内容を見出したことも示唆的である。対象として取り上げられている地域は、企画者の専門分野にも規定されてくるが、表象に関わる新たな模索として注目される。研究成果のひとつの現われとしての展示であったり、現代アートの作品であったり、その方法はひとつではない。このような流れのなかで、従来の型にはまった日本ではない、多様な日本を表象する企画が出てくるのかもしれない。

＜その他、見学した館について＞

ドイツ・ベルリン　ペルガモン博物館／巨大な遺跡がそのまま展示されているスケールの大きさでは群を抜いている。

ドイツ・ベルリン　ダーレム博物館／アフリカに関するコレクションが充実している。

ドイツ・フランクフルト　ユダヤ博物館／世界的な大財閥であるロスチャイルド家の邸宅を改造した建物で、ユダヤ人社会の歴史が詳しく展示されている。

ドイツ・フランクフルト　ユダヤ人街記念館／内部には発掘された街の一部がそのまま展示されている。館の裏手にはユダヤ人墓地があるが、塀に囲まれて施錠されている。塀には強制収容所で犠牲となった人びとの名前を刻んだプレートがはめ込まれている。墓地内には記念館の受付で鍵を借りて入ることが可能。身分証明書が必要。

ドイツ・ドレスデン郊外　ドレスデン民族学博物館／元々の建物はエルベ川の川沿いにあり、国王の磁器コレクションを収容することを目的としていた。建物の形状から「日本宮殿」と呼ばれ、展示施設として使用されている。現在、コレクションの大半は郊外の研究・収蔵施設に移されている。収蔵施設の日本資料のすべてがドローイング付であり、その精巧さには驚かされる。なお、ドレスデンは 2002 年夏の大水害で多くの建物が浸水し、日本宮殿も多大な被害を受けている。

デンマーク・コペンハーゲン　労働者博物館／2004 年 3 月に訪れた際は改築工事の真っ最中であったため見学はできなかった。同じ建物内にある準備室を訪れると、改築前の館内を説明した CD を頂くことができた。旧館では、19 世紀後半にデンマークで産業化がはじまって以降の、労働者の暮らしぶりが展示されていたようである。2004 年 8 月には規模を拡大し再開する予定となっている。

追記：本報告は文部科学省科学研究費特定領域研究（A)「わが国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究(江戸のものづくり)」(2001 年～2005 年）の一環として位置づけられている、計画研究班（A03C)「個々の資料から見た江戸時代の職人の色彩、造形に関する研究」(代表者：小林忠雄北陸大学教授　2002 年～2005 年)の一員として、2003 年 2 月－3 月、2004 年 3 月にヨーロッパの窯業地における現地調査に参加した際に収集した資料に基づいている。